

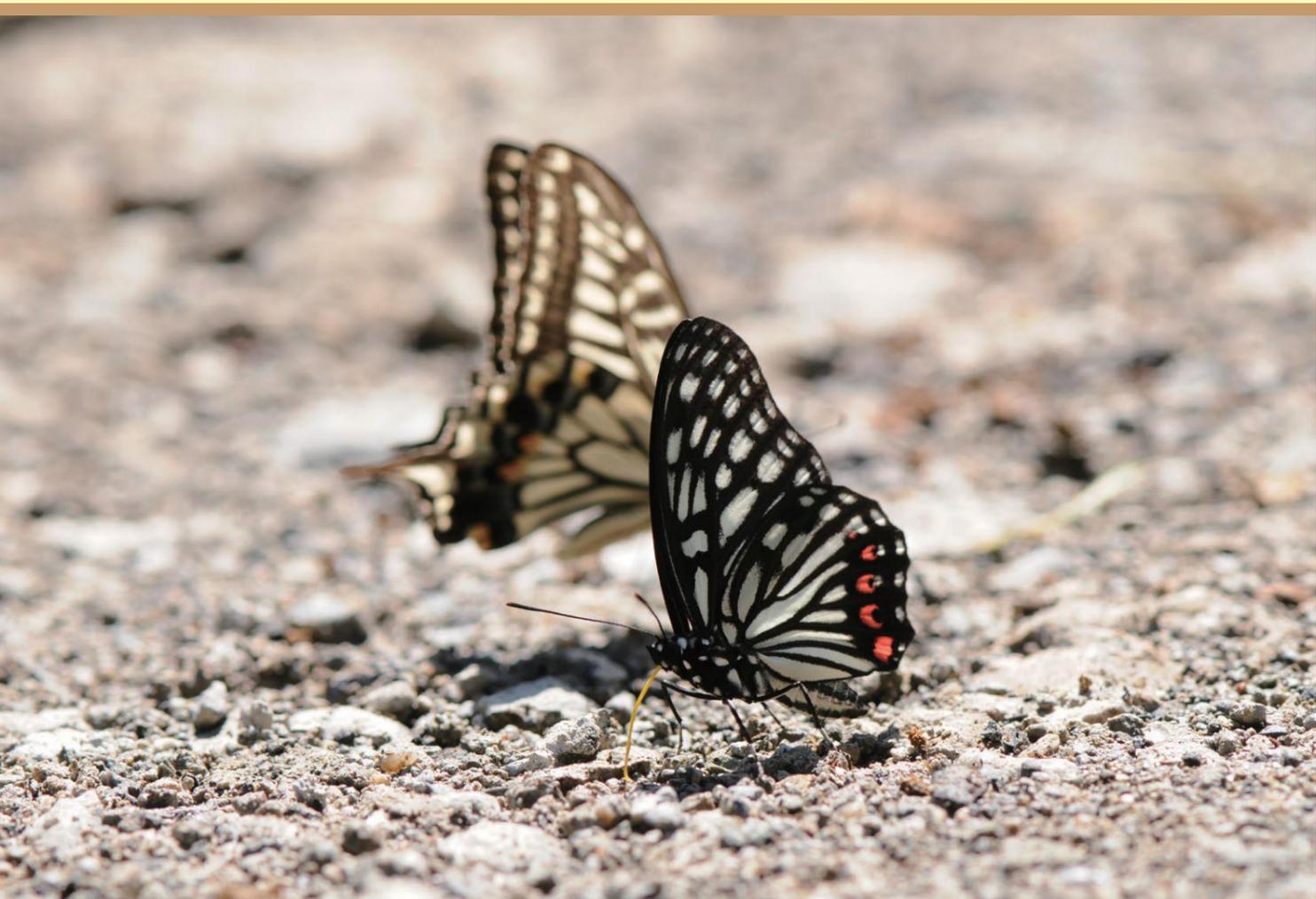
特定外来生物

緊急対策外来種

重点対策外来種

# アカボシゴマダラ

学名 *Hestina assimilis*



徴から、中国大陸産の亜種に由来と推定されています。自然の分布域から飛び離れていることや、突如出現したことなどから蝶マニアによる放蝶ゲリラであるといわれています。生息環境の幅が広いこと、今後も分布が拡大していくと考えられます。

## 影響

アカボシゴマダラはエノキを食草としています。近縁種にゴマダラチョウがいますが、これもエノキを食草とする在来種です。もともと類似環境に生息するゴマダラチョウと生態的に競合する可能性があり、特に縄張りを持つオスは他の蝶に排他的になります。オオムラサキやテングチョウもエノキを食草としているため、競合する可能性があります。また、ゴマダラチョウに比べ圧倒的に数が多く、目立つため、小鳥などの捕食者がアカボシゴマダラに誘引されてゴマダラチョウもこれまで以上に捕食されるのではないかと危惧されています。

さらに、今後この個体群が分布を拡大させ続け、奄美諸島へとたどり着いた場合、在来の個体群と交雑して遺伝子汚染を引き起こす可能性もあり、外来個体群の動向を注視していく必要があります。

## 分布



三浦半島全域

数も多く、大型のチョウの中で最も目につきます

ベトナム北部から中国、台湾、奄美諸島、朝鮮半島まで分布します。里山的環境から都市部にまで広く分布する普通種です。斑紋は近縁のゴマダラチョウによく似ていますが、和名が示す通り、後翅の外縁に鮮やかな赤い斑紋が出現することで区別されます。タテハチョウとしてはゆるやかな飛行で、斑紋も行動様式も毒蝶のマダラチョウ類に擬態していると考えられます。

日本には、もともと奄美大島とその周辺の島々だけに固有の亜種が分布します。しかし1995年に埼玉県秋ヶ瀬公園周辺で確認され、その後藤沢市新林公園周辺で確認され神奈川県下でも多数発生・定着するようになりました。現在は関東全域に広がっていますが、この個体群は、その外見上の特



# 注意

アカボシゴマダラは特定外来生物に指定されており、生きた状態での飼育や移動が禁止されています。ふだんはゆっくり低空を飛び回るので子どもたちの昆虫採集でも捕まえやすい蝶であることから、知らぬうちに外来生物法に触れてしまう危険性があります。

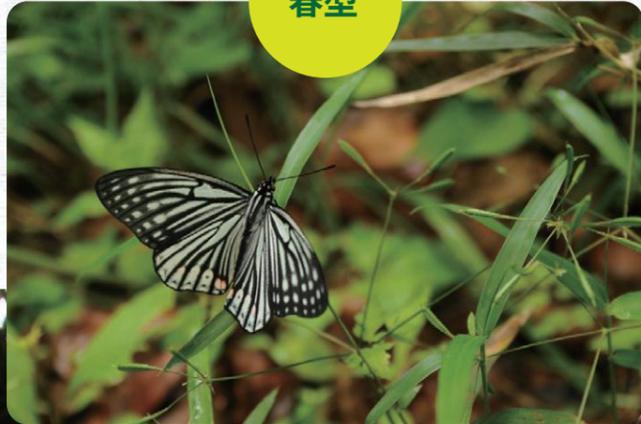


## 春型・夏型

翅は黒地に白の斑紋があり、白黒の縞模様に見えます。夏型成虫は後翅後部に赤い斑紋を持ちます。春型は赤い斑紋を持たず、黒色部分が少なく全体に白っぽい見えます。

奄美諸島と台湾の別亜種は、斑紋の形が異なることと、春型に白化型が出現しないことで区別されます。

春型



夏型



春型は赤い斑紋を持たず、黒色部分が少なく全体に白っぽい

## 似ている種

### ゴマダラチョウ 在来種

ゴマダラチョウには、後翅に赤い斑紋がありません。また、春型のアカボシゴマダラは翅の黒い部分より白い部分が多いのに対し、ゴマダラチョウは黒い部分の面積が広がります。

アカボシゴマダラは町中にも出現し、花壇の花も吸蜜に訪れます。ゴマダラチョウは雑木林の樹液などを吸っていることが多いようです。



ゴマダラチョウ

## 幼虫

頭に2本の角状の突起を持つ独特の形をしています。ゴマダラチョウの幼虫と大変よく似ていて、ゴマダラチョウの幼虫は背中の中三角の突起が3対なのに対し、アカボシゴマダラは4対あります。ゴマダラチョウの幼虫は尻の先が2つに割れているのに対し、アカボシゴマダラは割れていません。冬は幼虫がエノキの根元の幹や落ち葉にくっついて越冬します。

### Which is it? ゴマダラチョウとアカボシゴマダラ、幼虫の見分け方

#### ゴマダラチョウ



- 背中の中三角の突起が3対
- 尻の先が2つに割れている

#### アカボシゴマダラ



- 背中の中三角の突起が4対
- 尻の先が割れてない